

各委員からの書面による意見

第 1 回目・提出分

平成 24 年 10 月 16 日・委員会資料

双葉町復興まちづくり委員会

復興計画は、町の基本理念に沿って進めなければいけないと思います。

- 1) 全国にいる町民への生活支援、行政サービスの維持・継続
- 2) 故郷へ帰るまでの間、中長期的に対応する生活基盤の整備（仮の町）
- 3) 町民と一緒に帰還するふるさとの再生

この3つの基本理念で計画は策定されるべきです。

町民による町民のための復興計画な訳ですから、町づくり委員会が先行するのか？7000人の復興会議が先行するのか？三井所委員長より方向性をハッキリ示してもらわなければいけません。

7000人の復興会議も日程ありきではなく、自治会がある仮設住宅、借り上げ住宅でも実施した方が良いと思います。まずは町民の意見・意向を聞くようですから、分かりやすくテーマを絞って集約した方が良いと思います。

その上で、まちづくり委員会はそのテーマに沿って部会を設置し、町民の意見を参考に議論し、さらに分かりやすいアンケート調査を作成し、町民の考えを聞き取ることが良いと思います。

双葉町は現時点では県内3600人、県外3400人と他町に比べ県外比率が高い。復興計画は第1に町外コミュニティーづくりにあります。双葉町民である誇り・自覚のようなものを持ち続けることができる町づくりが必要ではあるが、これだけ分散していると困難、無理だと思う。

町外コミュニティーづくりは3パターンと考えます。

- 一つに、仮の町拠点を1つにする。
- 二つに、仮の町を県内外に分散させる。
- 三つに、仮の町をつくらない。

その3パターンの中で、それぞれ町民の皆さんが双葉町民である誇りと自覚を持てる様、安心して生活できる住民サービスを提供できるかにあると思います。

まずは、当然であると思うが、短期的にしなければならないこと、中期的にしなければならないこと、長期的に考えなければならないこと、を立案していきましょう。

まず、双葉町に帰れるのか。

帰れるとすれば、いつ、何年後なのか。

これが決まらないと復興のまちづくりは進まない。 目標が立たない。

町に帰れないとすれば、新しい町づくりを考えなければならない。

スタートはそれが決まってからでしょう。

早く役場機能を県内に戻して、一步一步前進しましょう。

その他種々とありますが、今回は私としての第一歩のみ。

委員名：藤田 博司

関係機関：行政区長

自然いっぱいの中で、繁殖和牛7頭を飼い、田は有機栽培を行って参りました。牛が生み出す堆肥を田畑に戻し、田畑からの残ザを牛にと、循環型の農業を営んできました。

米の販路も、横浜のうなぎ屋さんをはじめ、都会の方に直接販売して参りました。

家の周辺には、筍、フキ、ゼンマイ、タラの芽等、数えきれない程の山菜を収穫することが出来ました。

キノコも、椎茸、なめこ、ひらたけ、栗タケ、ムキタケを原木に植え楽しんでおりました。

又、双葉町商工会主催の逸品運動では、双葉町の特産品をつくり出すため、甘柿の太秋、栗のポロタン、梅の露茜を協同で苗を購入して、最先端の品種を植えました。

それ等が原発事故により一瞬にして宝の町から追い出されてしまいました。

双葉に戻ることは、どうしても叶えたいが、放射能という悪魔が何十年と続くことを思うと、すぐ帰ることが出来ません。

その間、自分達が住んでいた双葉町の暮らしに少しでも近づける場所が必要です。

双葉町は温暖な地であるため、雪国の生活には慣れておりません。

道路の凍結や屋根の雪下ろし等の経験をしたことがないので、気候条件の近い所に求めるべきと考えております。

職業についてしまった人は、その近くでないと困ると思います。

仮の町は、1箇所ではなく、分散して作った方がよいと考えます。

1. 新生双葉町創設は現実的に不可能と考えられます。
資金・土地・現状における双葉町民の生活状況から、現役世代の大半は、新しい土地に移住するとは思われない。
2. 現状の仮設住宅は不便で狭く、家族が一緒に生活することは困難であり、段々と住民は閉じこもりがちになり、落ち込んでいくのが見受けられるようになっている。
同様に借り上げ住宅の人達も、付近に顔見知りも居らず、引きこもりがちになっている。
このような状況の中で、速やかに救済するには、もっと広い住環境の場所へ斡旋の手を差し伸べることが大切だと考えます。
3. 2の状況の町民を間違いなく救済できる現実的な方法は、茨城県つくば市の公務員宿舎に移住への手続きを行政が率先して進めることが確かな道です。
つくば市の公務員宿舎は双葉町民がすべて収容可能な空き部屋があります。
双葉町から財務省へお願いし、また、福島県から茨城県への移住を認めてもらえば難しいことはありません。
つくば市から双葉町へは200km程度の距離で、高速常磐道を利用すればいつでも墓参り位は自由に行き来可能です。
4. 新生双葉町など所詮は絵に描いた餅です。せいぜい仮設住宅を纏めてどこにも行けない人や、体の弱い人達が移住する程度で終わるのではないのでしょうか。

今回の復興会議の趣旨に、町の復興のためには「仮の町」が不可欠という答えが先に決まっている点に疑問を感じます。

確かに町民の心のより所という存在は必要かもしれませんが。

しかし、放射線の影響から「仮の町」＝「骨を埋める覚悟」「終の棲家」の可能性が高く、判断ミスを許せない現状を鑑みても、選択肢は多様にあってしかるべきではないのかと考えます。

特に高齢者や弱い立場の方達のことを考えると、悠長な議論を重ねる余裕はありません。

現に子供の学校や、就労問題に直面する世代も待った無しの状態です。

もう今更動けない人もいることでしょう。

ましてやゼロからの出発では、呑気で立派な構想を描けば描くほど、所詮「絵に描いた餅」になり信憑性を欠くだけです。

コミュニティー自体も町単独の問題ではありません。親戚や友人は町を超え郡内に広がっています。

ただでさえ僅々の状況なのに順序・段取りを間違えると、ただ単に高齢者だけを集めた限界集落を作ってしまう可能性が高いのではないかと危惧しています。

町民各々が本来の双葉町に戻れない限り、どの地に行っても見知らぬ土地であり、であるならば放射線のリスクが少なく雇用が確保され、生活基盤の立て易い地を求めるのが本来の姿ではないでしょうか？

原発事故の避難から1年半も経過し、何の見通しも立っていない事が問題であり、当事者である町民の要望すら集約されておられません。

町民の気持ちを優先するなら、まず下記に挙げる選択肢のメリット・デメリットと優先順位を一刻も早く明示すべきではないでしょうか？

まずたたき台を挙げ町の考え方を周知するとともに、同時進行で計画を進める位のスピード感が無くては、町民の心は離れてしまいます。

【今後の可能性】

- ・ 仮の町
- ・ 避難先への定住
- ・ 新たな土地に新双葉町
- ・ 過疎の町への集団移住

【優先順位】

- 1、役場機能の候補地と職員の住まいの確保
- 2、仮の町を作るなら、現段階での候補地（福島県外も含めるのか？）を明示
- 3、雇用の確保をどうするのか？
- 4、学校と病院

委員名：吉田 岑子

関係機関：商工会女性部長

私の家業はガソリンスタンドを経営していました。創業は明治で、その時は炭・薪の時代で、固形燃料から石油製品に変わりました。スタンドは昭和42年の8月にオープンし、原子力発電と共に共存共栄で、安心神話の中での約40年間でした。その中で商工会にも参加し、女性部の部長として現在に至っています。

震災から1年5カ月、全てを失った今、何をしたら良いのか、我が身だけで無く部員達の安否の確認と今後の生活の事等、バラバラになっている今、仮設・借上を訪問して話を聞いて廻っている最中です。

その中で、今後の話になると、「まず『双葉町は帰宅困難である！！』とはっきり町長の口から宣言してもらいたい！！そうすれば、中間貯蔵施設も有りかと思うが、以前町長は『町は国に売らない！！』とテレビで見ましたが、私の土地は町長の物ではない！公共の物は町長が決めたら良いが、個人の所有地は国に売ろうが貸そうが個人の自由だ、と思うので、各々に選択してもらおうことも有りだと思う。・・・」の声が大です。 実際私もその考え方です。

又、子供を教育中の親の話は、「今、1年半にもなるし、子供達は避難先の学校に馴染んでいるので、この地で教育を続けたい、高校を卒業するまでは！！そのあとは、福島に戻るかどうかは子供達に選択させたい。」と言う若者夫婦にも話を聞きました。

こう言う意見の中、この復興まちづくり・・・とはすごく大変に考えています。子供のいない町、65才以上の町、帰りたい気持ちは皆持っていますが、現実帰れない事なので、本当に難しい事です。以前、川内村から郡山に避難しているお婆さんに話を聞きました。

「郡山の寒さは、川内村と同じだし、郡山は病院は沢山あるし買い物も近いから、今更川内村には帰りたく無い！！」と話していました。それも成程でした。

1回目の町づくり委員会の中で、商工会の田中清一郎委員の発言で、「双葉郡は8町村だから、その他の町で立ち上げた委員会の内容等を知りたい。」と言っていました。私も他町村との連携も必要に思いますので、2回目位迄に何かわかりましたら報告いただきたいと思います。

内容はまとまらず大変申し訳ございませんが、今のところはこんな状況です。

○町民1人1人に対するの早急なアンケートの実施（より多くの意見が集まる工夫、簡潔に）

○仮の町の候補地の選定、聞き方

漠然と場所を掲げるのではなく具体的に。

例えば「いわき市の××地区の国有地を交渉中」という方がピンとくるのではないか。

（どうせ無理と思っている人も多数）

○そこ（仮の町）にかかる個人費用の提示、どのくらいの予算で住める？

○区域分け、放射能の詳細情報の提示

○仮の町に戻らないパターン、現在いる場所に定住する場合の補助等

○失職した立場として「雇用の場」

第1回会議に出席しました。復興への具体的な取組がスタートしたことは大変に喜ばしいことだと思います。

今、私が思うことを書いてみました。

個人の意見は様々で、皆が置かれている状況も様々だと思います。

しかし、「ダメだ、ダメだ」では何も始まりません。また、全会一致も不可能だと思います。

多数決であるならば、よりスピーディーなアンケートの実施が必要です。仮の町が決まるまで何回とってもいいと思います。

私も理想と現実の間で揺れています。どうしたら良いかわかりません。時間だけが過ぎ、いつまでも人任せではられません。

何とかこの会が自立のきっかけ、明るく、優しく、楽しかった双葉町の再生となりますように切に切に希望します

委員名：吉田 清己

関係機関：学校保護者（双葉北小学校）

私は、震災前、双葉北小PTA会長をしていました吉田です。
現在は、いわき市小名浜に妻、子供3人の5人で借り上げ住宅で生活しています。
震災から1年5カ月余りたちますが、まだまだ先の見えない状況に、少々焦りを覚える頃々です。
双葉町だけが、すべてにおいて他町村から遅れをとっているように思われます。
他町村は、町独自で小中学校を運営しているのに、双葉町だけが無いのです。
先日、双葉町の集いがあり、子供達が集まる機会がありました。集まった子供達の嬉しそうな顔、楽しそうな顔を見ると、やはり心の拠り所となる双葉小中学校が不可欠ではないかと思えます。
早急に仮の町づくりを進めなければ、未来の双葉町は成り立っていかないと思えます。
震災の最大の被害者は子供達であり、老人です。老人は環境の変化に対応できずに大変な思いをしています。
私事ですが、小学生の息子も2度の転校を経験し、今も友人関係に悩んでいます。
一刻も早くこの不安定な日々から脱却したいと思っています。
復興まちづくりの議論も大事だとは思いますが、もっとスピード感が必要なのではないのでしょうか。

双葉町の再生復興まちづくりがようやく策定された。

現時点、子供の学校問題、仕事の件、自立に向け歩き始めている現在、町民の期待に沿う町づくりが遠くなっている現況ではないだろうか。

町民参加の 7000 人の復興会議も、全日程 7ヶ所での意見や要望を吸いあげることが出来るのか疑問である。日数と時間をかけるべきではないだろうか。

会議をもったというパフォーマンスで終わってほしくないです。

双葉町公式ホームページの町民への周知も、パソコン等持っていない、使うことが出来ないのが大半だと考えます。紙面でも細かい配慮が必要だと思います。

今まで生活して来た歴史ある双葉町を思いながらの復興は、何年、何十年先か計り知れないのが現状であり、仮の町は 1つの場所に設定せず、県内・県外と複数個所にあっても良いのではないかと思います。

因みに、茨城県つくば市は、住環境も良く、教育事情も小中一貫になり、緑があり、国家公務員宿舎が沢山空いています。

仮設住宅のせまい不自由な生活、家族がばらばらの生活を強いられている人達に早く手を差しのべなくてはならないでしょう。

子供達や若者の意見を聞きだしての町づくりは、大変良いことだと思いますが、中高年や高齢者の思いも決して無駄ではない筈である。

今まで待ったのです。細部に亘って広く意見を出し合いながら、夢のある現実的な双葉の町づくりを希望致します。

1. 双葉町復興まちづくりの地域について

(1) 原則として福島県内としたい

(1) 集中型の場合 郡山地区にしたい

理由としては、会津方面、白河方面、福島方面、いわき方面の中心

(2) 分散型の場合

理由については、立地するところがない場合

双葉会津町、双葉白河町、双葉須賀川町、双葉郡山町、双葉いわき町の5つに分散

今のところ、最低5年は帰宅困難であり、借り上げ住宅の家族も仮設住宅の家族も、この土地に住みながら職を求め、この土地の学校に通わせている。

2. 機能的なものについて

(1) 役場機能を加須から郡山地区に移す。

その場合大切なことは、双葉町民が格安で利用できる公共施設

(集会会場などに利用・広い駐車場)

(2) 分散型の場合はそれぞれに支所をおく。

(3) 分散型にそれぞれが馴染み、大人は近隣愛・友人もでき、子供たちは既に友達もでき学校にも馴染んでいる。労働力年齢の就職活動援助が課題と思う。

(4) 空いている仮設等については、不足している地域に移転するか、増設することによって、自然に町の形態ができあがっていくことにあまり時間はかからないと思われます。

3. 仮の町は、果たして必要なのかどうか疑問に思われる。どれだけの人数が集まり、世代の構成はどうか、もう一度調査の必要があるのではないか。

仮の町に住んでも、生活が成り立たなくてはどうしようもない。勿論それには町の立地する所に大きく影響されると思います。

最初ですので、双葉町復興まちづくりの基本的な検討課題・基本方針をあげます。

(20120827)

1. 持続再生デザイン (リデザイン・リレーデザイン)

地域に持続継承されてきた環境を、次世代(「将来、双葉町に居住する人」「双葉町に居住体験のある人の関係者」)にどう引き渡すか

(目標とシステムの抽出)

2. 仮居住デザイン (プロセスデザイン・ふるさとデザイン)

3・11からの避難仮居住プロセスの地域との絆の延長にあるデザインである

仮居住地は仮居住者(特に子どもにとって)の第2のふるさとである

(これまでの経過と意識の整理とコミュニティシステムの提案)

3. 持続防災復興デザイン目標の共有化 (地域の共有化、周辺地域との共有化)

双葉町町民としての「まもり」と「きずな」の目標を明確化、共有化する

周辺地域・友好都市と、「まもり」と「きずな」の連帯目標を明確化、共有化する

(地域主権と地域支援・地域連帯の方法の構築)

4. 新生国土グランドデザイン (ふくしま浜通りふるさと原風景デザイン)

東日本大震災復旧復興の象徴的なコミュニティデザインとなる

ふくしま地域再生・東日本国土再生の基盤になる地域の原風景とその活用システムを時間をかけて再生する

(双葉町固有の課題を新たな日本国土再構築の課題に連続させる)

5. 新システムの創生 (持続継承システムを再生・再活性化する新システムの創造)

新空間システムと新社会システムの一体的な提案

人類史にない全く新しい課題に直面していることを自覚し、上記の目標、検討課題に対して、先導的な解決方途を世界に示すことになる

(制度・社会システムの再編成が課題である)

復興まちづくりの場所の私の提案

1. 放射線量が低く、子供・孫達が安心して生活できる場所
2. 暖かく、雪の少ない所
3. 交通の便利が良い所
4. 就職が確保できる所
5. 教育が熱心で人材を育てることが出来る所
6. 病院、医者等が確保できる所
7. 断層のない所

○特に私が住んでいた双葉町山田地区は、放射線量が年450ミリシーベルトであると今年3月に発表されました。

150年～180年は帰れないので、福島県内とは限定せずに、場所選定は上記7項目を考慮していただきたい。

○いわき地区は人気があるが、朝夕は交通渋滞もあり宅地の陥没（炭鉱）、隆起、断層もあり欠点のない所は旧平地区に限られている。

○小名浜地区は化学物質過敏症の人は住めない。

○土地の条件の良い所は、価格が倍以上に上がっています。

これは双葉町へ帰り、復興するための委員会である。はたして何年後に双葉町に帰れるのか？

復旧するためには放射線量が左右する。地域によって放射線量が違う。すぐ帰れる所から20年後でも帰れない場所もある。

また、東電福島第一原子力発電所の事故後の収拾状況、放射性物質の半減期間、放射能汚染による人体等の問題などクリアしなければならない課題が山積している。

双葉町地域の放射線量が詳細に住民に公表され、警戒区域の帰還時期が明確に定められなければ復興計画は決められないし、その都度考え方が変わってくる。復興計画を作成しても「絵に描いた餅」になってしまう。

双葉町の放射線量の低い地域に役場機能と住民を帰還させ、ライフライン、災害公営住宅などのインフラの復旧・整備等を行うのか。また、インフラが整備されたとしても若い人が双葉町に戻ってくるのか。的確に判断しなければならない。

町民の心には永年住み慣れた所には戻りたい。帰りたい。これは全町民の願いでもある。

しかし現実はどうだろう。高齢者は双葉町に帰りたいと言うが、子ども・若い人は放射能に汚染された双葉町には戻るだろうか・・・・。

できれば放射能に汚染されたところには戻りたくない。これは明確な答えではないでしょうか。

「住みよさ」は、安心度、利便度、快適度などが求められる。人間として生活するためには住居水準を上げ、安全で快適で便利なところに定住したいのである。

町に若者が戻らなければ20年後には老人だけの限界集落、ゴーストタウン化となり双葉町は崩壊してしまう。必ずなる。

双葉町のランドデザインは、復興プランであると同時に「夢づくりプラン」でもある。

そこで場合によっては双葉町へ戻らなくてもよい復興まちづくりを考えるのも一考あるのではないか。

歴史をみると会津藩が御家再興のため1万7千余りの人が下北半島の地に移住し、斗南藩をつくった例もある。

双葉町は、双葉町帰還のランドデザインを定めなくてはいけないが、年間放射線量1mSv以下（目標）に抑えないと帰還することに抵抗がある。

町は「双葉の名」をとるか、「町民の健康」をとるか。判断しなければならない。

復興まちづくり（呼称が適切かどうか）は、現実を直視したとき、かなりの町民が自立への道を大いに模索中であるように聞いています。

特に子供を持つ若い世代や現役を引退したもののまだまだ余力のある世代も行動に移しているようです。

過日、第1回会議では、総論と各論が交錯し議論が乱れ、果たして、総論の目的・意義が各委員で十分に共有できないままに終わり、消化不良気味であった。

第2回以降は、総論・目的を大いに共有した上で、各論へ進みたいものであると考えます。

復興まちづくり＝「仮の町」が町民の終着であるとの錯覚をしがちですが、「仮の町」は町民のハッピーへつなげるベストの選択肢であろうか。

さらにみんなで汗を流して町民の真意をもう1回だけ深堀して、十分に議論をつくり、「仮の町」を検討しても遅くはないと考えるものです。（国の「仮の町」の考え方は決まっているのだから）

「仮の町」は、中長期に双葉への帰還が当然であるが、国・県の復興施策の中で、国道6号線、JR、JH（高速道路）等の大枠と原発4基の廃炉工事中のリスク等がまだ見えていない今、将来帰還へのインフラ、ライフライン、住居、耕作地等々、中長期的整備された生活スタイルが期待されるような結論を得たいものである。

復興と「仮の町」構想とは別に、活力ある町民の自立の背中を押す二方向の施策を同時並行的に進める、高度で難しい判断が大いに議論されるべきであると考えるところです。

今、土木とか建築とかの議論は早すぎないでしょうか。

1. はじめに

私は、まちづくり委員会には「若者代表」として参加している。普段は茨城大学大学院に通っており、歴史学（日本中世史）を専門に学んでいる。また、東日本大震災を機に、茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会（略称：茨城史料ネット）というボランティア組織の活動に参加し、主に無指定や個人所蔵の文化財・歴史資料の救済・保全活動を茨城を中心に行ってきた。現在はその事務局メンバーとして、茨城県内の他にも福島県南部・栃木県西部においても救済・保全活動を継続して行っている。

そのような経験から、まちづくり委員会や復興会議には、若者（学生）という視点と、歴史専攻という視点を生かして参加していきたい。

2. 「7000人の復興会議」について

(1) アンケート結果について

まず、前回の会議で提示いただいたアンケート結果について、私が課題だと感じた点を箇条書き形式で挙げてみる。

- ・子供を優先するといった理念を掲げている割に、小学生以下がアンケートの対象に含まれていない。
- ・アンケートの回収率が17.2%であり、これで町民意識の全体像を図ることは難しい。
- ・推定記入対象者が約6424人であるのに、実際の回答数が1108件という点もそうだが、そもそも住民票を他地域に移している、例えば大学生を中心とした10代後半～20代の層がアンケートの推定記入対象者に含まれていないのではないかと。現状住民票がなくとも、今後双葉町を維持・発展させていくつもりであるのならば、この層（若者層）のことを視野に入れて考えていかなければ、「仮の町」を作ったとしても、数十年には超高齢化を課題とした過疎地域となり、街は衰退していくと思う。
- ・データがH24.2月23日の回収されたものを基に作成されているが、震災から1年の時点と震災から1年5カ月を経た現在との状況では、人々の生活意識に大きな差が生じてきているように思う。年度が変われば、子供たちにとっては新学期が始まり、大学生は将来を見据えた就職活動を始め、就職し、働き始めてしまえば、転職することも容易なことではない。1年5カ月を経た現在では、変わらない現状を打破するためにいままでの生活に見切りをつけて、心機一転を図った方も多いのではないだろうか。

議論を行う上で、議論の基になるデータがなくては話が始まらないということは理解できるが、やはり今回のアンケート結果では不十分だと思う。前回の会議でエコエナジーラボの方から「町民の話を聴いていくことから復興会議を始めていきたい」という趣旨の発言があったが、まずは住民の意見を吸い上げられる体制を構築してから「仮の町」云々については議論していくべきであると考えます。

(2) 会議・アンケートの方法について

前回の会議の際にも発言させていただいたが、町民の意見を把握していくためには少なくとも、①会議・アンケートの周知の徹底、②アンケートの回収・収集方法の工夫、を行っていく必要があると思う。まずは、意見を聴くための体制がしっかり構築でいなければならないだろう。町の広報誌だけではなく、新聞やテレビといったマスメディアを利用するなど、町から切り離された人でも確実に情報が受け取れるような体制を構築を目指し、周知方法を徹底していくべきである。

(3) インターネットを利用した復興会議について

インターネットを利用した復興会議を行っていくということだが、そのためには、①インターネットが各家庭にあること、②インターネットを使いこなすことができること、が必須条件になる。それに加えて③運営側が町民のインターネット環境について把握していること、も求められる。いくらインターネットを利用することが散り散りになった町民の意見を集約することに適しているように思えても、実際の町民の置かれている現実とかけ離れていては、それはあくまでも理想のまま頓挫してしまうように思う。理想だけでなく、現実を把握した上で、実現可能性の高いことを行っていく必要があるのではないかと。

3. 「仮の町構想」について

「仮の町」には誰が住むことになるのであろうか。若い世代は、結婚や子育てといったことを考えると、少しでもリスクの低いところで生活したいというのが実情だと思う。私自身将来のことを考えた際に県外に住むことを視野に入れており、震災当時県外で生活していた友人の多くはそのまま県外に居住することを希望している。

また、ただ町の名前だけが残っただけでは双葉町ではないと思うし、いくら便利で都市工学の視点から見て優れた町になったとしても、それは双葉町ではないと思う。確かに「仮の町構想」というのは、新たな土地で新たな町を創ることなのかもしれないが、いままで積み重ねられてきた歴史や文化、人と人との繋がりを捨象した町では、わざわざ双葉町を称する意味がないと思う。そのような完全な別物になってしまうのであれば、わざわざ移住する必要も感じない。いままでの積み重ねの上にそれを基盤として成り立つからこそ、双葉町なのではないかと私は考える。

まずは、「仮の町」に実際に住みたいと思っている層がどのくらいいるのかを把握することから始め、「仮の町構想」に関しては、そこに生活する人の実態を無視した「便乗型復興論」ではなく、そこに生活する人々の実態と求めているものを汲み取った上で、現実と理想とを折衷して構想を立てていく必要があると思う。

4. 警戒区域にある双葉町について思うこと

(1) 双葉町は江戸時代には相馬中村藩領に属しており、旧南標葉郷である双葉町・大熊町においても100年以上続いてきたお宅も少なくない。中には300年以上続いてきたお宅も存在している。そのような地域であるから、家に住めなくなったことのショックは単純に割り切れるものではなく、多くの人が「御先祖様が残してくださった土地を自分たちの代で絶やしてしまう」ことに対する悔しさを感じ、それが精神的な負担になっているように思う。

事実、私の祖母は「御先祖様が残してくださった土地を守れなかった」といって塞ぎ込んでおり、新しい生活がしたいとは思っていても、気持ちの面では中々前に進んでいくことができずにいた。先祖伝来の土地を子孫に伝えたいけれども、汚染された土地を子孫に伝えていくことは心苦しい。そういったジレンマも生じている。

汚染された土地を手放すことになったとしても、別のカタチで御先祖様と子孫のために「何か」を残していくことができれば精神的に救われる部分もあるのではないか。私自身、本来ならば長男として家を継いでいく立場であったため、どうにかしたいと考えている。

(2) 今取り組んでいかなければならないと思うこと

私は歴史を学ぶ者として、何を残していけるのか、何を子孫に伝えていかなければならないのかをこの一年間考えてきた。

今回の東日本大震災によって引き起こされた福島第一原子力発電所事故の影響で、警戒区域に指定された地域では、未だ再建や復興の見通しが全く立たずに、地域コミュニティが崩壊したまま、歴史が途絶えようとしている。双葉町も例外ではない。

私は、東日本大震災直後から茨城史料ネットの活動に参加してきたが、その活動を通して、地位の歴史は地域にあってこそ意義があり、史料を守り、歴史を語り継いでいく担い手の存在なくしては次に繋がっていかないということを強く感じた。しかし、福島県浜通りの現状では、地域コミュニティが崩壊したため、史料を語り継いでいく担い手が地域におらず、このままでは、これまで地域や個人の家で受け継がれてきた歴史や文化が現世代で消滅する恐れがある。そういった地域に関して、後世に伝えていくための何らかの行動を現段階で行っていかないとならないと強く感じている。しかし、このことは一人では到底担いきれるものではなく、町民全員で行っていくべきだと考える。

そのような思いから私は、①地名・伝承の聞き取り、②震災体験の聞き取り、③個人・無指定の文化財の救済、の3点を急務として行っていくべきであると考えている。無形の史料として地域に存在していた伝承や地名を子孫に伝えるため、警戒区域に居住していた住民等への聞き取り調査を行い、それを二次史料として残す必要がある。なにより、そういった地域に伝わってきた伝承や歴史資料を残すこと自体が、町民全体で共有することのできる「心の拠り所」になるのではないだろうか。また、震災体験を次世代の教訓として記録に残すことは、震災を経験した現世代しかできないことであり、我々がやらなければならないことでもある。

委員名：樋渡 麻衣	関係機関：H24 新成人（大学生）
<p>東北大学医学部保健学科看護学専攻の樋渡です。</p> <p>私が気になるのは雇用の面です。</p> <p>復興のためには若者の力が必要だと思うので、若者が戻って生活をできるような雇用が必要ではないでしょうか。</p>	

委員名：井上 一芳

関係機関：副町長

7,000 人の復興会議、町民の皆様個々のご意見をきかせていただき、非常に良いことと思う。

双葉町を離れてこれまで一度もなかったことであり、是非対話会に私も参加していきたい。私自身、将来は双葉の地に戻りたいと思うが、今すぐ放射能に汚染された双葉町に帰りた

いとは考えていない。一定期間経過後放射能を除去し、それからでよいと考える。

それまでの間、どうするか。

やはり仮の町は、放射線を感じることもなくのびのびと暮らせる所が良いと考える。

いろいろ放射線量について言われているが、年間1ミリシーベルトは厳守。町民がまとまって住める場所、町としての機能があるコンパクトシティ、町人口から考えるとできれば1カ所と考えるが、2カ所もやむを得ないと考える。ただ、町としての機能はそれぞれに持ちたい。

子供達がのびのび学べる教育施設、病院を核とした健康福祉施設、にぎわいをもたらす商業施設、働く場としての農工業施設、町をリードする行政施設、交通弱者のための交通手段、等々検討していかなければならない。

何年になるか判らないが、仮の町とは言うものの生活の上では仮を感じさせないコンパクトシティであるべきと考える。

行政としてこれから取り組まなければならない、仮の町への法整備、受け入れていただける市町村との連携等、多くの課題はありますが、待っております町民の皆様に喜んでいただけるシティづくりをして行きたい。

そのためにも 7,000 人の復興会議を成功させたい。